

## 新満月祭と月

土山泰弘

### 一 はじめに

新満月祭<sup>(1)</sup> (Darsapūrṇamasa) は、その名の通り新月満月の日を中心として定期的に行なわれる祭式である。この祭式は Śrauta 祭の中で、牛乳やバター、あるいは米麦など穀物の調理したものを供物として用いる Haviryajña に属し、しかも執行形式の上ではその基本形式 (Prakṛti) とされる重要な祭式である<sup>(2)</sup>。新月満月の日に行なわれるこの祭式は、しかしながら月 (Candra, candramas) を献供の対象とするのではない。ヴェーダ祭式には月に供物を捧げる独立した祭式は存在しなかった<sup>(3)</sup>。またヴェーダ文献が月に言及することは、後に扱うようにソーマ (soma) との関係を除いて殆どなかった<sup>(4)</sup>。新満月祭と月との関係について、オルデンブルクは、この祭式において最も重要な神格であるインドラ (Indra) がその性格上月相との関わりを有しておらず、従って月はインドラへ供物を捧げるための時期を示すにすぎない<sup>(5)</sup>として、その曆法上の意義以上を認めなかった。ところでヴェーダ文献の中で祭祀解釈を主要な任務とするブラーミンマナ (Brahmaṇa) 文献の Satapatha Brāhmaṇa (以下 Sat. Br.) は、その新満月祭セクシヨンの中で儀軌と月との関りを意識して釈義を施す。結論を先取りして言えば、ここでは満月祭によって月を欠

けしめ、新月祭によって月の再生を成就するという意義が与えられるのである。オルデンベルクが指摘したような主神インドラとの関係を離れた別の局面がここにある。その意義は新満月祭の意義 (bandhu) を伝える意義に直接関わること、意義の対象となる儀礼が新満月祭全体の中で重要な位置を占めること、そしてその意義の中で月との連関をうたう背景にはリグ・ヴェーダ (Rgveda) に遡りうる古層の觀念が存在していることなどによって看過しえない資料であると思われる。

## 二 新満月祭の意義 (bandhu)

はじめに新満月祭の意義 (bandhu) を述べる意義をとりあげる。その概要は以下の通りである。

### (一) 満月祭の意義——インドラのウリトラ退治——

インドラによって息子ヴィシュヴァループ (Visvarupa) を殺されたトウマシトリ (Tvastri) は、怒ってインドラを除外してソーマを压榨したが、インドラがそのソーマを飲んだために再び怒って残りのソーマを祭火に注ぎ入れてインドラの敵の生長を念じた。それより生じたウリトラ (Vitra) はアグニ・ソーマ (Agnisoma) を占有したがインドラは直ちに彼を殺した (Sat. Br. I. 6. 3. 1-10)。

インドラによるウリトラ殺しまでが述べられたから内容的に完結している。続いてあらためてインドラによるウリトラ退治の次第を再話して、それを満月祭の儀軌に結びつける。

祭火より誕生したウリトラは成長して食物を食し、神々・人間・祖霊がウリトラに食物を提供していたが、インドラはウリトラに占有されていたアグニ・ソーマを、一一の kapala (陶片) 上で焼いた祭餅 (putodasa) を捧

げることを条件として味方につける (II-14)。こうして「両神格 (アグニ・ソーマ) は彼 (インドラ) のもとでやってくる。両神格のあとに続いて一切の神々が来た。一切の知識 (vidya) が、一切の榮譽 (yasas) が、一切の食物 (annadya) が、一切の繁栄 (stri) が (来た)。それ (アグニ・ソーマ) の一カマの祭餅を捧げ、ウリトラは今のインドラとなった。このことが満月祭の意義 (bandhu) である。そしてこのように知って満月祭を行なう者は、この繁栄に赴き、こうして榮譽を有し、食者 (annada) となる。」(15)

### (二) 新月祭の意義——インドラのソーマによる回復——

インドラは自身をウリトラよりも弱くと考えていたからウリトラをむけてヴァジラ (vajra 電撃) を投げつけ、恐怖して隠れ去った。神々はそれによってウリトラが倒されたことを知ったので、アグニがインドラを探し出した。そこで神々はインドラ・アグニ (Indragni) への二カマの祭餅を捧げたがインドラは衰弱していてそれ満足しなかった。そこで神々は雌牛の乳であるソーマをインドラに与えたがなおも満足しなかった。そこでそれを沸かして与えた (I. 6. 4. 1-8)。こうして「彼 (インドラ) はソーマの量が膨脹する如くは強力となった (apyayata)。彼は悪 (pāpman) ・黄痘 (bariman) を打ち倒した。このことが新月祭の意義 (bandhu) である。そしてこのように知って (牛乳と酸乳を) 混ぜる (sainayati, 即ちサンナーヤ (sainayya) を献供する) 者は子孫と家畜に満ちて悪を打ち倒す。それゆえに混ぜるべきである。」(9)

以上の意義から知られるように、満月新月両祭式の意義はそれぞれアグニ・ソーマへの祭餅献供とインドラへのサンナーヤ献供をめぐるインドラ・ウリトラ神話である。両祭式の意義はまとめて次のように言われる。

「満月祭はウリトラ殺しに関わる (vātragna) である。なぜならインドラがそれ (満月祭) によってウリトラを殺したのであるから。次に新月祭はウリトラを殺すこと (vitrāhaya) である。なぜなら彼ら (神々) は (インドラが)

ヴリトラを殺したときに、彼（インドラ）のために強化するもの (āpyāyana) としてそれ（新月祭）を準備したから。」(12)

こうして満月新月両祭式の意義はインドラ・ヴリトラ神話の枠組で一貫する。<sup>(9)</sup>

新月祭の意義 (Bandhu) と称して積義を伝えるのは Sat. Br. のみであるがこれらの儀軌は他のマラーフナでも積義が施される。ここではそのうち最も詳細な積義を伝える Taittiriya Saṁhita (以下 Tait. S.) の散文部分概観し、儀軌と積義の關係について Sat. Br. と比較する。

満月祭のフグニ・ソーマへの祭餅献供に関する積義では、インドラがヴリトラを倒そうとするときマズニ・ソーマが「ヴァジラを」我々に投げてはならぬ。我々は（ヴリトラの）内にあり。」と言いつ分け前 (bhagadheya) を要求した。そこはインドラは満月の日に両神格に「一カマールの祭餅を捧げたが「我々は（ヴリトラに）束縛され（abhisandastā）出る」とがむなしく。」と云う。そこはインドラは寒暑の気 (sitarā) を生じて、ヴリトラの欠伸を誘い、それよりフグニ・ソーマが解放される (Tait. S. 2. 5. 2. 24)<sup>(11)</sup>。次に新月祭のサンナーヤについては、インドラがヴリトラを殺したのも神々と力 (Indriya) を失ったが新月の日にはインドラは捧げる酸乳 (dadhī) をよこす回復する (2. 5. 3. 1-2)。また他方ではインドラがヴリトラを殺してのもその力 (Indriya-virya) が大地に入り、そこから植物 (osadhī-virudh-) が生じた。それをブラジパーヌティ (Prajāpati) が雌牛を集めて、その乳をインドラに与えた (2. 5. 3. 2-3)。

以下 Tait. S. は Sat. Br. と同様でインドラ・ヴリトラ神話が儀礼解釈のモチーフとされること、しかしながら Sat. Br. よりも積義と儀軌との間に密接な關係はなく、積義の内容にも一貫性を欠くことが知られる。また Tait. S. では儀軌と月の満ち欠けとの關係に言及していないことも指摘しておく。

以下 Sat. Br. において両祭式それぞれの意義を担うとされたフグニ・ソーマへの祭餅献供、及びインドラへのサンナーヤ献供の両儀礼が、満月新月両祭式の中で如何なる位置を占めるかという点について検討しておきたい。

Srauta 祭式の總要書 (Srautasūtra) の通則 (paribhasā) によれば、祭式を構成する諸儀礼の分類方法として tantra—āvāpa 及び pradhāna—ānga の二つがある。<sup>(12)</sup> 以下の tantra 及び Haviryajña や Somayajña の各 Tantra—āvāpa 及び pradhāna—ānga の二つが、祭式の枠組を構成する。これに対して āvāpa とは各祭式に属する諸祭式を指して共有される儀礼のセットで、祭式の枠組を構成する。これに対して āvāpa とは各祭式に属して挿入される儀礼である。従って tantra は各祭式間の共通要素であるのに対して āvāpa はそれぞれの祭式を他から区別して際立たせる個別要素と見えてよい。以下 tantra—āvāpa が祭式の形式に関する分類であるのに対し pradhāna—ānga は祭祀のまたの果報 (phala) との關係をいふ分類方法である。pradhāna は祭式の果報を直接結びつへ (Kātyāyana Śr. S. 1. 7. 20) に行なわれるのに対し ānga は pradhāna を補助する副行を自ら直接で果報をもたらすこととなる (1. 2. 4)。従って ānga を欠く pradhāna のみで果報を得る (1. 2. 18) と云われる。これらの分類法を用いて新月祭の構成を述べる通則は次のノートラである。

「Aiyabhāga (儀の āya 献供) 及び Agni Sviṣṭakṛit (「火を献供を行なう者であるフグニ」) に対する種々の供物 (navis) の献供) の間で行なわれる儀礼は āvāpa と称される。それは pradhāna である、他は ānga である。ānga が中断はあむむ的成就を補助する。それは tantra である。」(Śaṅkhaḥayana Śr. S. 1. 16. 3-6)。

Aiyabhāga 及び Agni Sviṣṭakṛit の間で行なわれる儀礼はフグニ・ソーマへの祭餅献供あるのはインドラへのサンナーヤ献供を含む主献供 (Pradhānahoma) である。従って主献供はこれを儀礼形式からみる āvāpa として他祭式から区別される祭式全体の個性を担うこととして pradhāna として祭式の果報を生ずる重要な意義を帯びてある。

ところでこの主献供の内容は三つの大きな儀礼によって構成される。<sup>(13)</sup>このうちアグニへの祭餅献供と upatisuyajia の二つは満月新月両祭式の主献供に共有されるから、両祭式の主献供を相互に区別するのは満月祭ではアグニ・ソーマへの祭餅献供、そして新月祭ではインドラへ捧げるサンナーヤ献供である。<sup>(14)</sup>両儀礼が満月新月両祭式を代表することはブラーフマナでも自覚されていた。「それ(主献供)の中のアグニ・ソーマへ捧げる祭餅」は満月祭の供物でもなければ新月祭の(供物)でもない。満月祭の供物はアグニ・ソーマのものであり、新月祭の供物はサンナーヤである。「(Sat. Br. 1. 6. 2. 6)<sup>(15)</sup>満月新月両祭式の意義 (Bandhu) がこれら両儀礼の意義として述べられる背景には以上のような両儀礼の儀軌的位置についての自覚があったであろう。

## 二 満月祭と月——ヴリトラと月——

### (1)

満月祭の意義 (Bandhu) を述べる釈義に続いて、同じインドラ・ヴリトラ神話のモチーフをふまえて月に言及する。<sup>(16)</sup>インドラに倒されて横たわっていたヴリトラをインドラが殺そうとするとき (Sat. Br. 1. 6. 3. 16) ヴリトラはインドラに対してヴァジラを投げないよう請い、その条件としてヴリトラ自身がインドラのご飯となることを約した。そこでインドラは、「彼(ヴリトラ)を二つに断った。そのなかでソーマの性質をもついた (yat saumyan nyaktam asa) ものを月とした。そしてそれ(ヴリトラ)のアヌラの (asurya) 性質をもついたものを腹(udara)としてこれら生類を結びつけた (avidhyat)。それゆえに言う『この時に食者たるヴリトラであった。いまやヴリ

トラである。』と。なぜなら今もそれ(月)が満ちる (apudyate) とき、それはこの(地上)世界より増大する (apyayate)。そしてこれら生類が食物を望むとき、(彼らは)このヴリトラのためだ、(すなわち)この腹のため (apyayate)。そしてこれら生類が食物を望むとき、(彼らは)このヴリトラのためだ、(すなわち)この腹のため (apyayate) をもたらすのである。さてこのようにこのヴリトラを食者と知る者は食者となる。」<sup>(17)</sup>。

このヴリトラでは食者と食物のモチーフが大きな役割を果たしている。食者 (annada, atij) と食物 (anna, adya, annadya) はブラーフマナの祭祀解釈で定型化された分類法のひとつで、儀礼行為、マントラ、祭具などの解釈に適用されるとともに、<sup>(18)</sup>社会や世界の二元論的解釈にも使用され、<sup>(19)</sup>ウパニシャッドに至って思想的な洗練を加えられた。<sup>(20)</sup>この釈義でも以下に述べるようにコスモロジカルな分類軸として使用される。

はじめにインドラとヴリトラの関係をみると、満月祭の意義を述べる釈義の中で当初ヴリトラは食者とされて神々らが彼に食物を提供していた (Sat. Br. 1. 6. 3. 11-12) といわれるからヴリトラと神々は食者—食物の関係にあったのである。それがインドラによるアグニ・ソーマへの祭餅献供によって、インドラはヴリトラよりアグニ・ソーマをはじめとして一切の神々、知識、榮譽、食物、繁栄を獲得したとされ、またこの意義を知って満月祭を行なう者は食者となる<sup>(21)</sup>といわれた。すなわちインドラとヴリトラの間に食者—食物の関係が結ばれてヴリトラの立場が逆転したのである。本節で紹介した釈義の中で、ヴァジラを恐怖したヴリトラがインドラのご飯となることを申し出たというのはこのことに対応する。食者と食物の関係を逆転することがインドラのヴリトラ退治の内容であり、それによって祭主が食者となることが説明される。またインドラがヴリトラを食物として享受する内容も食者と食物のモチーフで分類される。インドラはヴリトラを二分して月と腹とにしたといわれるが、このうち腹は生類の腹となつて食者とされ、一方月はソーマ、すなわち後に述べるように神々の食糧となるのである。要するにこの釈義におけるインドラによるヴリトラ退治の内容は、ヴリトラからの月と腹の展開として満月祭の舞台設定を行なうという印象を

与える。<sup>(19)</sup> インドラ・ヴリトラ神話にはリグ・ヴェーダ以来コスモゴニカルな性格を認めることができるが、以上の釈義もかかる観点から理解することができよう。

次にヴリトラと月と腹との関係についてみると、ヴリトラのアスラの部分が腹とされるのは、それが人間に飢えをもたらすからである。「ヴリトラは腹である。飢え (kṣudh) は人間にとって悪 (pāpman)」、敵 (bhṛatryva) である<sup>(20)</sup>。といわれる。他方ヴリトラがソーマの性質を有するとは、先に紹介した満月祭の意義を述べる神話の中で、「インドラの飲んだソーマの残りからヴリトラが生じた (1. 6. 3. 8) ということから知られる。また他祭式の釈義においてはソーマとヴリトラが端的に一致される。例えばソーマ祭の釈義の中でソーマ压榨とその压榨されたソーマ汁を神々に献供する儀軌を解釈して、インドラをはじめとする神々によるヴリトラ殺し (即ちソーマ压榨) と神々による殺されたヴリトラの享受 (即ちソーマ献供) を述べる場合があり、そのときにソーマとヴリトラの一致が明言される。<sup>(21)</sup> いま問題として積義ではかかるヴリトラとソーマの連関が満月祭の文脈の中で月に結びつけられたのである。このときブラーフマナ一般で定型化される月<sup>(22)</sup>ソーマの觀念も背景にあったであろう。こうしてヴリトラは月と一致される。「満月祭はヴリトラ殺しに関わる。そして月がヴリトラに他ならない。」(Sat. Br. 1. 6. 4. 13) すでに検討したように、アグニ・ソーマへの祭餅献供をインドラ・ヴリトラ神話のモチーフを用いて解釈することは他のブラーフマナと共通し、しかもそこではヴリトラと月の関係を見ることはできなかった。それがここでヴリトラと月との一致を打ち出すに至った背景には、ヴリトラから月と腹の展開を述べるコスモゴニカルな積義があったのである。<sup>(23)</sup> Sat. Br. ではさらにすすんで太陽と月をそれぞれインドラとヴリトラとして、食者と食物のモチーフによって月の満ち欠けを説明する。

「かの燃える (ya esa tapati) もの (太陽) はインドラである。そして月はヴリトラである。それゆえ前者は後者<sup>(19)</sup>とって生来の敵 (bhṛatryvajaman) である。」(1. 6. 4. 18) 新月の日にヴリトラはインドラの口の中へ入り、インドラはヴリトラを食して昇る<sup>(19)</sup>。太陽であるインドラは「それ (月—ヴリトラ) を吸いこつてのち (nirdhiya) 投げる。それゆえそれは吸いとられて西にみえる。それは再び増大する (apayate)」。それはそれ (太陽—インドラ) の食物となるために再び増大する。<sup>(24)</sup> (20)

## (二)

ヴリトラが月と一致されることによって、インドラのヴリトラ退治という満月祭の意義 (dandhu) は、満月祭の諸献供によって月の欠けをひきおこす<sup>(25)</sup>こととして再解釈される。

新満月祭は通常二日間行なわれて行なわれる。第一日目では祭主夫妻の精進潔斎や祭壇設け、供物の準備がなされてられ、第二日目に献供が行なわれる。当時、満月祭の開始を何時に定めるかをめぐって議論が行なわれていたが、<sup>(26)</sup> Sat. Br. では満月の月を第一日目とすることを主張する。<sup>(26)</sup> 以下に引用する積義はこの主題に関係するが、内容的には (一) で検討した月と腹をヴリトラに由来せしめる觀念をふまえて、満月祭に月を欠けしめる新たな意義を与えるのである。

「彼 (祭主) が満月祭 (の戒) に入らうとするとき (upavatsyat) 決して満足 (subhita) してはならない。それによってアスラの腹を圧する (vlinati)。翌朝には諸献供によって神聖なるもの (daira) を (圧する)。そしてこれが満月祭の儀礼 (upacara) である。彼は今こそ (満月祭の戒に) 入るべし。『今や私はヴリトラを殺すべし。今や怨敵を殺すべし。』と考へよ。」(Sat. Br. 1. 6. 3. 31-32) subhita とは食事に関する満足をいう。この積義では満月祭の戒 (vrata) に入るに先立って肉食を慎むという節食の儀軌<sup>(27)</sup>を指す。また祭式綱要書では祭主夫妻の節食の戒に関してこの語を用いる。

「(第一日目の) 午後(祭主夫妻は) sarpis (液状の牛酪) を伴う精進料理 (vratopāyāniya) を満ち足りる」  
となく (asubhita) 食する」と」(Katy. Śr. S. 2. 1. 10)

ここで引用した釈義によれば、食事の節制がアスラの腹を圧することとして解釈されるが「アスラの腹」(udara-asurya) とは前項 (一) で引用したブラーフマナ (Sat. Br. 1. 6. 3. 17) で述べられたヴリトラの中のアスラの部分を指す。<sup>(28)</sup> ヴリトラのアスラの部分として生類に結びついた腹がここでは祭主の腹とされて、節食の儀軌がアスラの腹を圧することとして解釈されたのである。従ってこの釈義で続いているところの翌朝諸献供によって圧される「神聖なるもの」とはヴリトラのソーマの部分である月を指すことと推測されよう。満月祭開始日を主題とする釈義は他のブラーフマナにもみられるが、その月を「神聖なるソーマ」(daiva-soma: Aitareya Br. 7. 11) 「神々の真実」(devasatya: Kausitaki Br. 3. 1) と称される。またブラーフマナ一般で月は「神々の食物」(devānam anna-) といわれる。要するにこの釈義では前項 (一) で検討した釈義にみえる月と腹をヴリトラに由来せしめる観念をふまえて、満月祭第一日目の節食と翌日の諸献供を結びつけ、ともにヴリトラ殺しの意義を与えたのである。こうして満月祭におけるインドラのヴリトラ退治という意義 (bandhu) が月に結びつけられて満月祭によって月を欠けしめることとして再解釈されたのである。

### 三 新月祭と月——ソーマと月——

#### (1)

新月祭の意義 (bandhu) を述べる釈義の中で消耗したインドラを回復させるサーンナーヤについて次のように言  
「彼ら(神々)は彼(インドラ)のためソーマを集めた。月は(ソーマ)であり神々の食物である。それがこの夜  
(新月の夜)に東でも西でもまたな(ソーマ)の世界で来る。それはこの世界で水、植物 (ap-osaṅhi-) に入る  
(pravisati)。それは神々の膏 (vasu) である。なまむ彼ら(神々)の食物であるから。それがこの夜に、この  
世界で共に (ama) 住む (vasati) ゆえに新月の夜 (amavasya) と称される。彼らは雌牛をそれ(水、植物)に入  
った月、即ちソーマ)に従って分散せしめて (anuvisthāpya) 集めた。すなわち植物を食した時は植物から、水  
を飲んだ時は水から(集めた)。このようにしてそれを集めて、凝固させて濃縮して、それを彼(インドラ)に捧  
げた。」(Sat. Br. 1. 6. 4. 5-6)。

月であるソーマを雌牛を通じて集めるとは新月祭第一日に行なわれる夕方の搾乳 (sāyamādhā) の儀軌を指す。<sup>(30)</sup>  
この時搾乳した乳に、前項の夕方、~~ある~~ 翌日朝のフグニホートラに使用した乳の残りを混ぜて固めるのである。  
それがサーンナーヤと称される供物で、翌日の主献供の中でインドラに捧げられることはすでに述べた通りである。  
ところでこの釈義によればサーンナーヤがソーマと一致される根拠として、新月の夜に月であるソーマが地上に來  
るといふ<sup>(29)</sup>。この観念は次項で扱う釈義にもみられるが、Sat. Br. の他の箇所にもみることができる。例えば火壇築

海の祭式 (Agricayana) で行なわれる献獣祭の執行日に関する異説を紹介して、月はブラジャーパティで月が東にも西にも見えない新月の夜には、このブラジャーパティが地上に来てからこの日に献獣祭を行なうべきであるといふ<sup>(32)</sup> (6. 2. 2. 16-17)。また新月祭の置火式 (Agnyahaya) において、祭火を祭場に定置することを解釈して、新月の日に地上に來た月の形象 (Tupa) が祭火であるといふ<sup>(33)</sup> (11. 1. 1. 4)。以上のように新月の日に月が地上に來るといふ觀念は他の釈義にも知られており、その儀礼の主題に応じて変容されてとり込まれるのである<sup>(34)</sup>。

## (11)

次に引用する釈義では、新月の日に月が地上に來るといふ觀念をふまえて月の再生を導き出す。

「さて (新月の日に) 先立って、(雌牛が) 単なる (kevala) 植物を食み、単なる水を飲んで単なる乳 (即ち月) ソーマならざる乳) を出すことはこの場合も同様である (evam tad)。月はソーマ王であり、神々の食物である。月がこの夜、東にも西にもみえないとき、月はこの世界に來る。それはこの世界で水、植物に入る。そこでそれを水、植物より集めて (それを) 諸献供より生ずる (janyati)。それゆえ、それは諸献供より生じて西にみえる。」 (1. 6. 4. 15)。

この釈義を含む前後のブラーフマナは新月祭開始日の決定を主題とする。先行するブラーフマナ (14) では異説として、新月の日に先立って、月の未だ消滅しない日に新月祭を開始するという主張を紹介する<sup>(35)</sup>。この異説の論拠となるのは「なんととなれば前の食物 (月) が滅しない間に、つづく食物の來ることが成就するから。」といふ<sup>(36)</sup>。Sat. Br. ではこの説を批判して右に引用した釈義を述べるのである。すなわち夕方の搾乳によって月であるソーマを集めて、それを翌日のサンナーヤ献供から再生させることに意義をもとめて、そのためには月が地上に來る新月の夜に搾乳を行なうべきこと、それゆえその日を新月祭第一日目とすべきことを主張する。この釈義では月の再生は「諸献供か

5] (ahutibhyah) と言われるが、実際にはサンナーヤを指すことは次の釈義から明らかである。

「この夜には食物 (ソーマ・月) が神々から離れ去る。そこで (食物は) この世界に來る。彼ら神々は、いったいどのようにしてそれは再び我々のもとに來るか、いったいどのようにしてそれが我々から離れて滅することがないかということ望んだ。そこで彼らはサンナーヤを行行者達に期待した。『彼らは我々のために (食物を) 集めて捧げるであらう。』と。」 (17)

ここにみえる食物の往還は次のようにも表現される。

「神々の食物は尽きることなく回帰する (pariplavate)。このように知る者にとって (食物即ち月ソーマは) この世界では尽きることなき食物であり、彼方の世界では不滅の善業 (sukta) である。」 (16)

月が善業といわれるのは、月の再生がサンナーヤにもつくことを指しているであらう。

ところでリュエーダースによればリグ・ヴェーダのコスモロジカルな觀念のひとつとして、可視的な天の彼方に環流する大水が存在し、それが降雨を通じて地上に到來して生命を養い育むという考えがあった。この大水はソーマとも称されて、ソーマ讃歌の中には地上に到來したソーマの天上への上昇が詠われる。このソーマと月との一致が明言されるのはブラーフマナに至ってからであるが、そこではすでに定型化された觀念として広く見出される。ここで検討した釈義ではリグ・ヴェーダに遡るソーマ循環の觀念を可視的な月の満ち欠けという周期性の中に表象するのである<sup>(39)</sup>。従ってサンナーヤによって月ソーマを天空に再生させるといふ行為は天則 (Ita) の表現というリグ・ヴェーダ以来の意義を反映することになる。



四 結 語

以上を要約すると Sat. Br. では満月新月両祭式のそれぞれにおいて、儀軌的に重要な位置を占めるアグニ・ソーマへの祭餅献供と、インドドラへのサンナーヤ献供に関連して、インドドラによるヴリトラ殺しと、消耗したインドラの回復を内容とする両祭式の意義 (bandhu) を伝えていた。このモチーフは他のブラーフマナに共通するものである。ところが Sat. Br. ではこのモチーフを再解釈し、ともに祭式開始日をめぐる論議の中で、満月祭の諸献供には月を欠けしめる意義を、また新月祭のサンナーヤには月の再生の意義をそれぞれ与えたのである。すなわち満月祭のインドドラによるヴリトラ殺しの意義に関連して、インドドラのヴリトラ享受をヴリトラからの月と腹の展開として敷衍することによって、インドドラがヴリトラを倒すことを月を欠けしめることと解釈した。他方新月祭の場合はサンナーヤによるインドラ回復という従来からの神話的意義に加えて、サンナーヤによる月の再生を導き出した。このように他のブラーフマナに比べて Sat. Br. では当該祭式と月との連関を明確にうき出したところに特徴を見出すことができよう。Sat. Br. はブラーフマナ文献の新層に属し、浩翰な量と内容の体系的性によってブラーフマナの代表とされるが、その面目をいかに発揮していると言える。ただしここで注意すべきこととして、それが可能であったのはリグ・ヴェーダに遡る古層の觀念を継承し、それを新月祭と月との関わりの中に再構成しえたからに他ならない。すなわち月との関わりを意識しながら、インドドラ・ヴリトラ神話のロスメモニカルな側面と、ソーマ循環の觀念を、それぞれ満月祭新月祭の意義の中で再解釈しえた点に Sat. Br. の独創があったのである。<sup>(8)</sup>

註

- (1) 滿月祭の儀軌について A. Hillebrandt, Das altindische Neu- und Vollmondopfer in seiner einfachsten Form, Jena, 1879. Strautakoša, vol. 1 English Section pt. 1, Poona, Vaidika Samśodhana Mandala, 1958 pp. 211-501.
- (2) 古代インドの祭儀の全貌の註釋について A. Weber, "Zur Kenntnis des vedischen Opferrituals" Indische Studien. 10, 1868. rpt. 1973 S. 322-326.
- (3) 祭儀の神話的註釋の中心について A. Hillebrandt, 祭儀の神話的註釋の中心について A. Hillebrandt, op. cit. S. VII-VIII, 115-116 Strautakoša op. cit. pp. 365-367.
- (4) トーマと阿波知の祭儀について A. B. Keith, The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads, vol. 1 Cambridge (Mass.) 1925 rpt. 1970 Motilal Banarsidass, Delhi/Patna/Varanasi pp. 122-123.
- (5) H. Oldenberg, Die Religion des Veda, 2. Auflage, Stuttgart/Berlin 1917 rpt. Darmstadt 1970 S. 439. 同書に A. B. Keith, op. cit. vol. 2, p. 319.
- (6) ユニオン・オブ・ヒンドゥー教の Sat. Br. 1. 6. 3. 1-17 及びその註釋について A. Hillebrandt, "The dual deities in the religion of the Veda, Amsterdam/London, North-Holland Publishing Company, 1974 pp. 381-384.
- (7) 原のトーマと阿波知の祭儀 (Daśarātrayaīṇa) について A. Hillebrandt, "Indices Am-sterdam, 1919 rpt. Wiesbaden 1970, S. 204 (§ 158)
- (8) ユニオン・オブ・ヒンドゥー教の Sat. Br. 1. 6. 3. 1-17 及びその註釋について A. Hillebrandt, "The dual deities in the religion of the Veda, Amsterdam/London, North-Holland Publishing Company, 1974 pp. 381-384.







